

仏教の社会的役割 - 僧侶のプロフェッショナルリティを問う -

大正大学総合佛教研究所 三浦周

キーワード 仏教の社会性 / 護法論 / 国家と仏教 / 通俗仏教

0、はじめに 問題の所在

①「仏教の社会性」と「僧侶の社会参加」の混同…社会=近代社会/近代=専門分化

②僧侶による医療と僧階をもつ医者

～「医学と仏教の分化は医療の近代化を促すことになったのである」(新村 2013) ⁱ

③歴史の取舍選択…例:「日本」「近代」「仏教」「社会」「史」

⇒「社会に役立つ仏教」という強迫観念

1、プレ近代思想としてみる排仏論・護法論

①排仏論…国学(神道)・漢学(儒教)・洋学(キリスト教)による仏教批判

→原典・原義の尊重 / 「本来の仏教」の提示 / 僧侶遊民論

②護法論…諸宗同徳会盟八ヶ条の課題

～(1)王法仏法不離之論 (2)邪教研窮毀斥之論 (3)三道鼎立練磨之論

(4)自宗教書研覈之論…近代仏教学 (5)自宗旧弊一洗之論…戒律復興運動・新仏教運動

(6)新規学校営繕之論…宗門系大学 (7)宗々人材登庸之論…海外留学

(8)諸州民間教諭之論…社会事業・海外布教

→近代化のモチベーションとしての「護法」

2、「護法」をめぐる問題点 仏教は社会改良思想として有効か？

①「邪徒法律ヲ立テ教ト云フ尊シテ王教ノ上ニ置事、淫奸ノ至リナリ。夫政ト教ト一致ナルコト鳥ノ両翼車ノ両輪ノ如シ、相離ルルコトヲ得ズ。蓋シ政ハ正也。上ヨリ正ヲ示ストコロナリ。教ハ効也。下ノ法リナラフトコロナリ」(養鷗徹定 1869) ⁱⁱ

→儒教論理の援用…徳治(秩序の維持)

②「天台教観の学、研究し易からず、古来、良書甚多しと雖、現今の教育制度に對して、繁簡難易の適し難きは、元よりその所のみ、於茲、一宗總會の協賛を経て、中学程度の学生のために本書を編纂せり」(『教観綱要』1910) ⁱⁱⁱ

→教育機関において「学習」される仏教…「知識体系と支配構造の相互浸透」(下田 2007) ^{iv}

③「破邪ないし護法は僧弊一洗を刺激した点もあるが、キリスト教にたいする感情的反発は、仏教の近代化をおくらせるはずみにもなった」(吉田 1967) ^v

→皇国史観への反発…二重の作意による歴史構築

3、「通俗仏教」という可能性

①仏教「正史」に対する仏教「稗史」の必要性

→「ものがたり」性の欠如

②仏教は社会に何を求められているか

→「マジック」「プラクティス」…コンテンツ化する仏教

③機能分化・アウトソーシング

おわりに

①仏教が「国家」を喪失する「ものがたり」

②僧侶の僧侶による僧侶のための仏教

ⁱ 新村拓『日本仏教の医療史』(法政大学出版局 2013) p289。

ⁱⁱ 杞憂道人「笑耶論」『明治仏教思想資料集成』二(同朋社出版 1980) p16。

ⁱⁱⁱ 天台宗務庁学務課編『教観綱要：台学階梯』(天台宗務庁 1910)「凡例」。

^{iv} 下田正弘「神仏習合という可能性」『宗教研究』81号 2007 pp.73-77。

^v 吉田久一「明治期の仏教」『日本佛教史』III(法蔵館 1967) p.326。